

Q 義務教育学校のメリットは何ですか。

A 小・中学校の教員の共通理解のもと、9年間を見通した子どもたちの発達段階を踏まえた教育が行われます。よりきめ細やかな学習指導や生活指導が実現するため、子どもたちの今日的な課題の解消などの効果があります。

Q 校舎はどうなりますか。また学区はどうなりますか。

A 当面の間は、小学校、中学校の校舎をそのまま使います。学区も進学先の中学校も変更はありません。

Q 今後、義務教育学校は、小・中学校の施設が一つになりますか。

A まずは、既存の学校施設を生かした施設分離型での義務教育学校を進めていきますが、施設分離型の取組の成果や課題を踏まえたうえで、将来的に施設一体型義務教育学校の設置を想定しています。

Q 入学式や卒業式、運動会等はどうなるのですか。

A 連携してできる行事や、それぞれの学校で行う行事について、子どもや家庭、地域の方の意見も聞きながら進めていきます。

Q 保護者や地域はどのようにかわればよいのでしょうか。

A 子どもたちの連続した学びは、学校、家庭、地域の全体で支援していくことが重要です。引き続き、学校行事や地域学習、ボランティア等への参加をお願いします。

Q 先生方は、今までとどのような違いをもって、児童・生徒に関わるのですか。

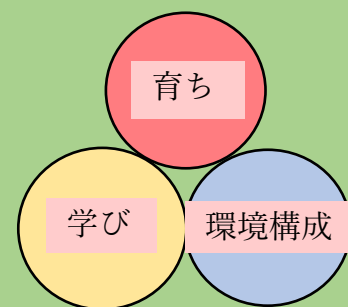
A これまでも小・中学校入学準備説明会や部活動見学など、園と小学校・小中学校と連携した取り組みを行ってきました。これからは、小・中学校が同じ課題意識を持ち、一つの教育目標のもと、義務教育9年間のつながりを大切にし、子どもたちの学びや育ちを支えていきます。

Q 小・中学校が離れていると、義務教育学校は難しいのではないのでしょうか。

A 施設一体型と比較するとできることは限られますが、子どもたちの9年間の学びや育ちを支える教育環境の充実のため、段階的にできることから取り組んでいきます。また、交流授業や行事、部活動やボランティアなど児童・生徒の触れ合う機会を設けるなど、施設が離れていても工夫することで、一貫した教育につなげていきます。

秦野市の園小接続カリキュラムとは

就学前教育と義務教育との接続については、遊びを通して学ぶ幼児教育から、教科等の学習を中心に学ぶ小学校教育への円滑な接続を目指したカリキュラム。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について、共通理解を図り、お互いの子どもの育ちと学びをつなぐもの。



秦野の特色ある取組

秦野こども 未来づくり会議	NIE (新聞を活用した教育)	通級指導教室
はだのっ子アワード	多様な学びの場の提供	大学と連携した 教育活動
よむよむ DAY	エコキッズはだの	はだのっ子学びの教室 (寺子屋学習)
コミュニティ ・スクール	民間企業と連携した 教育プログラム	国際理解教育 (パサデナ・パジュ)

令和6年3月 秦野市教育研究所 発行



園小中一貫教育～その先へ～

～ふるさとで未来を拓くはだのっ子

つながる学び ひろがる世界～

秦野が目指す 子ども像

変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな人間性、健やかな体の知・徳・体のバランスがよく、そして、地域社会において自ら行動できる子ども。



はじめに

本市では、全市的な取組として平成23年4月から幼小中一貫教育を推進してきており、平成30年に作成された報告書では、各中学校区の環境特性や学校風土に応じた交流活動や体験活動を10年以上にわたり展開したことにより、育ちの連続性の確保という視点で成果があったと報告されています。

しかし、令和2年以降はコロナ禍における臨時休業や教育活動の制限という未曾有の事態に直面し、本市においても不登校の増大やGIGAスクールへの対応等の新たな教育課題への対応にも迫られ、さらに子育て環境の変化から公私園種を越えた取り組みとして園小中一貫教育に名称変更等の転換期を迎えています。

そんな中、令和2年度から教育研究所を中心に研究を進めている義務教育学校という新たな学校制度は、園小中一貫教育の未来予想図となるのではないかと考え、今回の研究及びパンフレット発行に至りました。



秦野市が考える義務教育学校について

これまでの園小中一貫教育の歩み

先人たちの熱意、努力により築かれてきたより良い教育環境を土台に生かして、子どもたちの学びと育ちの連続性について、平成15年度から研究校を指定して、幼保小連携、小中連携の教育研究に重点的に取り組んできました。

各研究校では、平成15年度から小中連携教育、17年度からは幼小連携教育の研究実践に取り組む中で、子どもの発達と学びの連続性を意識した教育活動の有効性が確認され、その後平成21年10・11月の教育委員会会議において改めて議論となり、幼児・児童・生徒の円滑な成長を促すことをねらいとして平成23年度からの教育振興基本計画である「はだの教育プラン」に重点施策として幼小中一貫教育を位置づけ、全市的な取組としてスタートしております。

さらに、文部科学省「架け橋プログラム」の進捗と並行しながら、育ちと学びの連続性を意識した「園小接続カリキュラム」を研究実践しているところです。

義務教育学校の制度を導入することで、本市の強みである園小中一貫教育の取組を、法的・制度的な面においても、より具現化し、子どもたちの円滑な「育ちと学び」を深化することができます。

義務教育学校とは

「義務教育学校」は、一人の校長の下、一つの教職員組織が置かれ、義務教育9年間の学校教育目標を設定し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校のこと。心身の発達にに応じて、義務教育として行われる普通教育を基礎的なものから一貫して施すことが学校の目的とされています。

小学校6年間と中学校3年間を一貫した1つの学校で生活を送ります。義務教育9年間を見据えて学ぶことで、安定した学校生活を送ることができます。

新たな学校種

《義務教育学校》

- ・一人の校長
- ・一つの教職員組織

修業年限：9年
前期課程 6年
後期課程 3年



中学校の先生が授業に来てくれたりするから、中学校進学への不安が解消されたね。

5年生と7年生の交流など、小学校と中学校が別々ではなかなかできない、たてわりの交流ができる。



小学校での様子が分かっているの、子どもの実態に即した支援ができるのは、とてもいいね。

小学生との交流する場面が、増えたことで、上級生としての自覚や自尊感情の高まりにつながるね。

義務教育学校の目的

将来の変化を予測することが困難な時代を前に、子どもたちには、自ら未来を切り拓いていくための資質・能力を培うことが求められています。

新しい時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力を確実に育むために、園からの円滑を踏まえて、小学校6年間、中学校3年間という枠にとらわれず、義務教育9年間のつながりを大切にした「義務教育学校」を推進します。また、取組を進めることで、小学校・中学校に進学する際の大きな環境の変化を和らげ、新しい環境への適応につなげます。

今後、施設分離型義務教育学校の設置を視野に入れ、成果と課題を明らかにしながら、将来的に施設一体型の義務教育学校への移行について検討していきます。

義務教育学校 学び舎3本柱

学びの基盤プロジェクト

学習の基盤となる「非認知能力」の伸びを把握し、児童生徒個々の成長を記録した「学びのカルテ」を作成し、「何ができるようになったか」に着目した学びのスタイルの変革を目指すもの。

HADANO スマートスクール

AI搭載の教育支援アプリの活用やC B T（※タブレット端末等を用いて試験を行うこと）等、I C Tの積極的な活用を図り、学力向上と業務改善の両立を図るもの。

はだのふるさと科

独自のカリキュラムであり、自然や歴史、平和学習等、秦野ならではの特色を9年間系統立てた課題解決型の学習プログラム。将来、子ども達が、社会で活躍するための基盤となるもの。

学年区分と発達段階の捉え方（一例）

9年間の発達を3つの段階で捉え、9年間の区分「3-3-3」を基本とします。

5年生から、教科担任制、定期テストを導入します。

	第1期			第2期			第3期		
学年	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年	7 学年	8 学年	9 学年
授業スタイル	学級担任による授業		一部教科担任制		教科担任制（一部例外あり）				
定期テスト					7、12、2月		5、7、9、12、2月		
評定	2段階	3段階					5段階		
児童・生徒会	当番活動、係活動、児童会活動				児童・生徒会活動、委員会活動				
クラブ活動・部活動					一部の部活動に参加が可能		すべての部活動に参加が可能		

児童会活動の委員会活動や生徒会活動は、主に、2期、3期の児童・生徒で組織し活動します。

小学校のクラブ活動と中学校の部活動は、連携を図りながら活動します。